

「政権準備政党」として ダイナミックな政治工作を

拓殖大学海外事情研究所准教授 丹羽文生

過日の自民党総裁選は、当初の予想通り、現職総裁で首相の安倍晋三が元自民党幹事長の石破茂を破り三選を果たした。石破は党員算定票で一八一票（四五％）を獲得したと言え、議員票は僅か七三票（一九％）と大きく水を開けられており、俯瞰すれば「善戦」したと言えない。

これで反主流派は、ほぼ消滅した。しばらくは安定した政権運営が続くだろう。

一方、安倍再登板後の国政選挙で五連敗を喫した野党勢力は小党分裂状態で、いずれも存在感はない。総裁選前の九月四日、国民民主党代表選が実施されたが、総裁選の陰に隠れてしまい、国民の関心はゼロに等しく、政治評論を生業にしている筆者ですら、代表選があつたことを忘れていたほどである。

選挙戦は玉木雄一郎が津村啓介を大差で破り「共同代

「対決より解決」を掲げていた玉木だが、来年の参院選を控え、近頃は立憲民主党との協力を模索する方向に舵を切りつつある。しかし、単なる数合わせのためだけの野合なら、直ぐ国民に見抜かれる。本気で政権奪取を目指すのであれば「ずっと野党」の立憲民主党とは一線を画すべきであろう。ここは多少のリスクは覚悟の上で、ダイナミックな政治工作に打って出る必要があるのではないかと。

自民党総裁選前の八月二十八日、元参議院議員で民主党政権において官房副長官を務めた松井孝治が自らのツイッターに「石破さんの正論と粘着力（蒸し返し）は、個々の決定の積み上げ尊重の自民党」よりも「野党の体質と親和性があるのでは」と書き込み、永田町で大きな話題を呼んだ。松井は旧通産省にいた頃から石破と親交があるらしい。

ちょうど去年の今頃だった。衆議院解散を前に人気絶頂だった東京都知事の小池百合子が希望の党を立ち上げた際、野党第一党の民進党が「駆け込み寺」の如く、これに逃げ込み、その結果、政権選択選挙の様相を呈し始める。

政権選択選挙となれば、首班指名候補不在のまま選挙戦に突入するわけにはいかない。だからと言って現職知事の小池が出馬すれば「都政投げ出し批判」は避けられない。そこで出てきたのが「石破首班指名」案だった。小池と

表」から「単独代表」に選ばれた。しかし、その行く先は前途多難である。政党支持率（NHK、二〇一八年九月）を見ても、国民民主党は〇・七％と、一％にも満たない。告示日当日に離党者が出る有様では、玉木に挑んだ津村が言ったように、まさに「消滅危惧政党」である。

何より国民民主党には政権奪取の工程表が全く見えない。玉木は二〇二〇年代前半を目標に国民民主党を中心に政権奪取を果たしたいと口では言うものの、具体的な方策は何ら描き切れていない。

野党第一党の立憲民主党に至っては今や批判政党であることに生き甲斐を見出す万年野党となりつつある。政党支持率（同）も僅か四・八％である。

一九九三年一月、「鉄の女」ことイギリス元首相のサッチャーが来日した際、民主政治において最も大切なものとは何かを問われ、彼女は「健全な野党」と答えた。「健全な野党」とは何か。それは「政権準備政党」のことを指す。あまり偏った野党では、政権に絶対近づけませんので、ずっと野党でいる気なら、どうぞあちらに行ってくださいという感じだ……。これは今から半年前、当時、国民民主党の共同代表だった大塚耕平が参議院議員総会で発した言葉である。「偏った野党」とは立憲民主党を指していることは明らかであり、実に真つ当な考えである。

石破は新進党で同じ釜の飯を食った仲でもある。結果的には実現せず、希望の党も惨敗を喫したが、少なくとも、この事例一つ取ってみても、石破は松井が言うように「野党の体質と親和性」があることは確かであろう。

「政治は生き物」である。この際、国民民主党は、党勢回復の救世主として石破を三顧の礼で迎え、派閥丸ごと抱え込んでみてはどうか。政権与党に対して是々非々のスタンスを持つ保守系野党たる日本維新の会も巻き込むくらいの大胆な手を打ってもいい。

政権与党を監視、チェックすると同時に、「対決より解決」のスタンスで責任ある対案を提示し、併せて、政権奪還後に実現するビジョンを仕込みながら、国民が安心して政権政党の椅子を託すことができるだけの実力を磨くべきである。かつて、多くの有権者の期待を受けて誕生した民主党政権が僅か三年三ヶ月で崩壊したのは、手段であるはずの「政権交代」が目的化してしまい、政権与党になるための準備を怠っていたからに他ならない。

五五年体制下の社会党のように批判政党に甘んじていては、万年野党であり続けるだけである。「政権準備政党」として、真剣勝負で「競争」することは安倍自民党の脅威にもなる。政治全体に緊張感を与える「健全な野党」誕生に期待したい。